

運動の心地よさを味わわせ、表現する力をのばす体育・保健体育学習

— 思いや考えと作用し合う表現をめざして —

1 体育・保健体育科で願う豊かな学びの姿

本学校園体育・保健体育科では「運動の心地よさを味わわせ、表現する力をのばす体育・保健体育学習」をテーマに一貫した体育・保健体育学習の研究を行ってきた。その中で子どもたちの豊かな学びの姿として次のような姿を求めている。

○豊かな学びの姿

- ・挑戦する意欲をもっている姿（意欲，耐性）
- ・体を動かしたくなる，動くときもちいと感じる姿（情緒）
- ・身体を動かしている姿（技能・体力）
- ・運動を習慣的に行っている姿（活用）
- ・技能構造を追求し，考えている姿（思考・知識）
- ・仲間とかかわっている姿（協力）
- ・自分や仲間の姿を観察し，思ったことを言葉や身体をつかって説明している姿（思考，判断，表現）

このような子どもたちの姿を追い求めながら「思考力・判断力・表現力」を高め，それに伴い，技能の向上をめざしている。そのような子どもの姿を追い求める授業の中で，これまで子どもたちから次のようなふりかえりが出された。

私は二つのことを考えてしました。一つはおもいきりけることで，もう一つはCくんが言っていたタタダーンのところです。最後が大またにならないように気をつけました。すると，すごくやりやすくてきたからよかったです。この前よりもっと遠くにとべて，もう少しで3mもいきそうです。遠くにとんだとき，Dちゃんが，バーンってすごい音がしていたよと言ってくれました。次のはばとびでは3mよりもっととびたいです。
(幅跳び単元のふりかえり／小学4年児童A)

とび前転は自分で見てみないとどのくらいの高さがでているかとか，どのくらいの回転の速さなのかわからないけど，友だちに少し高さが低いと言われたので，ゴムなどを跳び越えて前転する練習をしました。その成果もあって中間発表会では，一つひとつの技が丁寧にできました。

今回のマット単元は，今までより積極的に練習することができて，友だちともアドバイスし合って，練習場所も工夫してできたのでとても楽しくできたし，上達したと思います。

(マット単元のふりかえり／中学3年生徒B)

小学4年では，幅跳びの運動局面をしばらくしながら遠くに跳ぶためのコツをみつけていく中で，ある局面に集中しながらお互いの動きを見合い，よさを共有し，試そうとする姿がうかがえた。中学3年では，仲間からアドバイスをされることにより，自分の課題をみつけ，その課題を克服するために練習場所を工夫することで上達していく姿がうかがえた。

体育における学習場面には，自分の運動している姿が見えにくいという状況がある。したがって，自らの課題をみつけ，それを解決していくためには，仲間とのかかわりが必要になる。仲間から自分がどのように動いているのか見られ，指摘されることで，どこがよいのか，どこが課題となるのかということをも明らかにしていくことができる。自分の言葉や自分なりの表現方法をつかって相手に伝えたり，反対に仲間から伝えられたりすることで，思考が深まり，「○○するとよさそうだ」，「○○してみよう」と判断し，コツを意識しながら練習をすることで，さらなる技能の向上がみられると考える。動きについて言葉や動作で表現することを大事にすることで，子どもたちは運動のポイントについて話し合い，思考や判断が深まっていくと考える。指導者として運動の系統性を意識したり，適切なはたらきかけを行ったりすることにより，技能を定着させていけると考えている。

2 昨年度までの研究の経緯

(1) 体育・保健体育科における思考力・判断力・表現力

これからの体育学習において認識学習がさらに重視されている。運動領域での認識学習は「できる」につながる「わかる」、を生み出すものであると考える。その基盤として「やってみたい」という思いが必要となる。その力は、場の設定が工夫された教材との出会いや、仲間との豊かな交流によって引き出されることが多い。自分たちの課題は何なのか、自分たちは今何につまずいているのか、それはなぜなのか、どうしたらうまくできそうか、仲間同士で動きを見合ったり、話し合ったりしていく中で学習内容の核心である課題解決にむかっての仲間との交流が促される。その交流の積み重ねを通して「ひとりができる」ことが「みんなができる」ことへ発展していき、そこで、思考し、判断し、実際に動いたり仲間へ声をかけたりして表現することで新たな思考を生み、思考力・判断力・表現力が次々と巡っていくと考える。

子どもたちの「やってみたい」という追求の心は本来備わっている欲求の一つであり、この気もちこそが課題を解決するために考えようとする力、まさに「思考力・判断力」であり、「できる・わかる」ために最も大切であることが昨年度までの研究において実証された。そして、その追求の力を呼び起こすために大切なのは「運動の心地よさ」を味わわせ、運動に対する欲求を高めることであり、それが課題を解決しようという意欲へとつながると考えた。その時に生じる「思いや考え」を全体やグループの場に広める（表現力）ことで互いに高め合いわかり合える喜びを感じさせ、「やってみたい」という思いを強め、次への意欲とつながっていくと考えた。

動ける身体の基盤の上に「やってみたい」と思える運動の心地よさを味わうことができれば、運動に向かう気持ちは高まり、自然と動き出したり、できるようになるために思考を巡らせたりしながら、さらなる動ける身体をもつことができるであろう。そして、その気もちや感覚は残り、生涯を通じて運動に親しみ、その結果として体力の向上や、人とのかかわりが深まるはずである。さらに、今までの遊びや生活、学習経験をもとにして自分や仲間の課題やその解決方法を考え、その思いや考えを伝えることでお互いの力を高めることができると考えた。

これらをふまえながら、思考力・判断力・表現力についての11年間のつながりを下のように考え、取り組んだ。

初等部前期	遊びやたくさんの運動経験をしながら、自分の「やってみたい」という思いをもち、表すことができる。
初等部後期	これまでの運動経験を生かしながら、自分の課題を見つけ、運動のポイントを考え、運動することができる。
中等部	既習の基本的な知識・技能をもとに自分自身や他者の課題を発見し、適切な解決方法を選択し、考え、さらに実践することができる。

11年間の学びの中で、子どもたちに「できてうれしい」という気もちを味わわせ、さらに「これならできそうだ」という感覚をもたせることで「もっとできるようになりたい」という意欲につなげてきている。また、「できそうだ」という感覚をもたせるために、子どもたちの実態をとらえながら、様々な運動感覚を体感させてきた。その上で、運動の視点を設けながら、グループや学級全体で学び合いの場面を設定することにより、意欲をもって取り組み、課題を見つけるために、ともにかかわり合おうとする子どもたちの姿が見られるようになってきた。

(2) 思考力・判断力・表現力を育てる学び合い

ここで、小学2年生の運動パーク～腕支持・逆さ・回転感覚～の実践を紹介する。この単元では、ダンボールを越える前回りや、川わたり側転から平均台などいろいろな回り方に挑戦していった。「川わたり側転を生かして、横とびこしをやってみよう」では、前時の川わたり側転を生かして、どのようにすると、腕支持の状態ですぐに回ることができるのか試していった。その中で、教師のはたらきかけによって、次のような学び合いがあった。

教師：△△さんはどうして上手に回れたのかな？

児童E：川わたり側転をやるようにしているから。

児童F：跳び箱の面を見ているから。

児童G：手はパーで足をとじていた。

児童H：地面を強く、このあたりをバーンとけていた。(跳び箱のふみきり位置を指して)

教師：結局何に気をつけたらできそうかな。

児童I：手をそろえる。

児童J：床を強くける。

児童K：川わたり側転をするように。

教師：では、これらの意見を生かして、もう少し挑戦してみよう。

子どもたちのふりかえりを見ると、運動のポイントをよく考えたり、友だちの演技をよく観察したりしていることがわかる。そして、時間を追うごとに、ふりかえりの中に仲間の意見や様子が登場することが多くなり、かかわり合い、学び合いが活発になってきている。学び合いの時間に上手なポイントを見つけようとするので手や足、ふみきりなどの局面に目をむけ、子どもたちは見方を広げていった。また、「結局何に気をつけたら…？」と発問することで広がった視点を整理させ、焦点化することができた。次に、「これらの意見を生かして…」とはたらきかけたことは、子どもたちに「○○に気をつけてやろう」という思いをもたせ、次の運動へとつなげていくことができた。このように学び合いの場面を意図的に設定することにより、子どもたちの思考や判断を促し、次の「やってみたい」へとつながっていった。そして、動きを見る子どもたちの目が育ち、それを言葉や動作で伝える力がのびていった。

運動の心地よさを味わわせながら、思考・判断したことを表現する力をのばしていく中で、子どもたちのふりかえりや子どもの動きを見て、一人ひとりの課題や考えをとらえていった。そのとらえたものをもとに、一人ひとりがのびていくためには、次の時間にどのようなはたらきかけが必要であるのかを準備し、取り組むことができた。また、個々の考えをもとに、ねらいにそって提案していくことで、その視点をもとに、よい動きを見つけようとする姿や、仲間の考えから自分の考えを広げ、次の動きに生かそうとする姿をとらえることができた。授業中の発言や、ふりかえりから、個々の子どもの変容や追求している姿や新たな疑問などもとらえることができた。

このように個々の子どもの1時間ごとの様子を教師がとらえておくことで、単元構成の中での意図的なはたらきかけをして、学びをつなげていくことができた。子どもをとらえ、はたらきかけることは、単元を進めていくうえで大変重要であるということがわかった。

3 本年度の研究

(1) 思考力・判断力・表現力を育て高めるための授業づくり

体育・保健体育の学習において思考力・判断力・表現力を高めるためには次のような工夫によって学級全体で学び合う場面を構想することができると考える。

①学び合う場面の構想

体育・保健体育の学習では、自分の動きを見るのが難しいため、自分の動きをイメージすることも難しい。そこで、ペアやグループでの活動や、話し合いをもとにしながら、その思いや考えを学級(集団)全体へ投げかけ、共有して解決していくような課題の設定が必要である。お互いの考えに思いを巡らせるためには、課題を見つけるための観察の視点をしぼることも必要である。

さらに、より多くの人の考えにふれさせ、これまでの自分自身の思いや考え、知識と比較することで思考をゆさぶったり、新しい考えを実感できたりするような直接的な教師のはたらきかけも必要である。しかしながら、技能を身につけるためには、「こつ」を意識した練習時間を十分確保することが大切である。短時間での意見の共有化を進められるような場面設定の工夫も大切であると考えられる。さらに、練習時間においては、個に応じた教師のはたらきかけが技能の習得において重要となってくる。そこで、子どもが伝えたいことをより明確にし、全体が共有できるように考えを掘り下げたり、自分や仲間の追

求のよさを感じながら学びを進めていけるように価値づけたりすることで、よい動きのイメージをもちながら運動をすることができるようにはたらきかけていく。そして、学習カードや板書、ふりかえりを工夫し、子どもの思いや考えを全体に表現し、共有できる場を設定していく。その活動によって子どもの思考の変容や新たな発見を教師が把握できるようにしていく。

また、豊かな表現を生み出すためには、過去にどれだけたくさんの運動を経験してきたかが重要になってくる。したがって、動きの系統性を意識した単元構成も子どもたちの思考を円滑に引き出すために工夫が必要である。系統性を意識することで、新たな運動場面において、以前思考し、判断したことを思い出したり、運動感覚を呼び起こしたりしながら運動をしていくことができる。そこから、さらに上達していくためにはどのようにしたらよいのか、新たな課題をみつけ合うことで思考力・判断力・表現力が育成されていく。発達段階に応じた運動との出会わせ方や、身につけさせたい力を明確にすることなど、系統性を大切にしながら確実な力につなげていきたい。

②単元・題材配列表における、思考力・判断力・表現力を育成する上で大切にしたいこと

単元・題材配列表の作成にあたり、思考力・判断力・表現力を育成する上で、発達段階に応じたつけたい力を明確にする必要がある。そのつけたい力をもとに、子どもたちが視点をもって動きを見合い、見つけたことを学級（集団）全体で共有する場を設定することによって、動きが「わかる」「できる」ようになっていけるようにしていった。

(2) 学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

①学び合いにおける教師のはたらきかけ

「やってみよう」と思える子どもたちを育てていくために、学び合いの中で変容していく子どもたちの考えを、体育ノートやふりかえり、具体的な動き、ペアやグループ内での仲間への言葉かけをとらえ、評価していく。評価規準は、子どもたちの発達段階をふまえ、つけたい力を明確にした単元の目標と照らし合わせながら設定していく。また、子どもたちの考えを掘り下げたり、体育ノートにコメントを書いたりすることにより、子どもが自らの考えを深めたり、よさを感じたりすることができるようにし、次時にその考えを生かそうとすることができるようにする。1時間ごとの子どもたちの意識の流れをつかみながらはたらきかけ、一人ひとりやグループでの学びが、全体に広がっていくようにしていく。

②学び合いにおける思考力・判断力・表現力の評価

思考力・判断力・表現力の評価は「運動や健康・安全についての思考・判断」の観点の評価基準によって行う。1時間の学習の中で、運動のポイントをつかんだことにより、大きく変容することもあるが、思考力・判断力・表現力がすぐに高まるわけではない。単元を通して、子どもたちが運動のポイントに気づき、その動きをその場で試して、自分のイメージと実際の動きを調整していけるようにしていきたい。

4 成果と課題

学び合う中でペアやグループでの活動を取り入れることにより、自分や仲間のよい動きや課題となる動きがわかり、自分だけでは気づくことができなかったポイントに気づきながら学習をしていくことができた。また、学級の実態をもとに、発達段階をとらえながら運動の視点を焦点化したことにより、子どもたちは運動のポイントに気づいていった。さらに、教師のはたらきかけによって、気づいたポイントをさらに深めていくこととなり、互いにかかわり合う中での話し合いの質も高まり、技能の向上につながっていった。

しかし、互いの動きを見合う際に、発達段階によっては焦点化したポイントが見えにくかったり、わかりにくかったりすることもあった。子どもたちの発達段階をとらえ、どのような運動場面に視点をもって焦点化していくのか、そして、どのように観察の仕方を工夫していくのか考えていきたい。また、今回の実践では、小学校ではグループ、中学校ではペアによる学び合いを設定した。今後は、子どもたちの発達段階、単元、運動の特性などをふまえながら、集団の人数による学び合いの効果のちがいも探っていきたい。

(文責 小草 康弘)